

目的：生活に密着した慣用色名は色みを的確に伝えることができるが、伝統色名などのように生活が変化したことによって認識が難しくなった色名や、JIS表示値よりやや高彩度に認識される慣用色名もある（日本家政学会第41回発表）。また、その認識において性差などの影響もあると考えられる。そこで本報では10代後半を対象に調査を行い、男女の違いをみることによって生活の中での慣用色名の認識と役割などについて検討を試みた。

方法：調査対象は首都圏に在住する男子（16-18歳）148名、女子（18-19歳）179名である。男子は1989年11月に質問紙によるアンケート調査を実施した。女子は第41回の被験者の中より該当者を抽出した。調査において、呈示色、光源及び慣用色名（105語）の色みを問う項目は第41回と同様であるが、生活意識では18項目とした。また、その評定結果は因子分析（固有値1.0以上、バリマックス回転）により基本的因子と因子得点を求め慣用色名の認識との関連について考察した。

結果：慣用色名において、認識されている色名は男子は調査用語の53.3%、女子は66.7%であった。また認識があいまいな色名は男子18.1%、女子16.2%、認識されていない色名は男子28.6%、女子17.1%であった。男女とも納戸色、シアン、新橋色、蘇芳などは80%以上の被験者が具体的な色を選定できず、芥子色はJIS値より高彩度傾向が認められた。しかしベージュ、生成り色では認識に性差が見られた。一方、生活意識では基本的因子として、男子7因子、女子8因子が抽出された。累積寄与率は男子64.9%、女子68.9%で男子は社会的関心、女子は文化的関心が強く、色名の認識にもやや影響を及ぼしていた。